
I S 転生者の軌跡

雪丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生者の軌跡

【Nコード】

N3764BA

【作者名】

雪丸

【あらすじ】

神様の部下のミスで短い人生を終えてしまった少年「神楽 湊」
彼は、神様の提案でISの世界に行くことに……。織斑一夏やその仲間たちと一緒に楽しく生活していく……。しかしその平穏ながらも楽しい日々を脅かす黒い影が少しずつ彼らに迫っていく。湊たちはその黒い影に立ち向かうことを要されるようになっていく……。湊たちの運命は？そして黒い影の正体とは？

第1話プロローグは突然に

「ここは・・・」

気がつくと俺は見知らない空間にいた。周りを見渡すが辺り一面真っ白で何も無い・・・ここはどこなんだろう・・・

「ここは死者が行き着く最後の場所じゃ」

「誰だ貴方は？・・・それに死者って俺は死んだのか？」

「僕はオヌシ等の言う髪と呼ばれる存在じゃ。それとオヌシの思っているとおりのオヌシは死んでおる。」

やっぱり死んでいるのかよ。・・・ああ結構やり残したことばかりなのに。こんな時に後悔ばかりなんて何か嫌だなあ

「・・・」

「実はな君に少し用があつての」

「？用？何の」

「スマンかったッ!!」

神様は、いきなり土下座をしてきた。ッてはあああああ!?

「えッ!?!ちよっ頭上げてくださいッ」

「そうもいかなのじゃッ!! 儂の部下の天使がミスさえしなければオヌシは死ぬことはなかったんじゃ」

「だとしても貴方が謝ることじゃないでしょう!？」

「部下の責任は上司の責任じゃ」

この神様部下の責任も自分の責任とかんじているんだな。・・・ここまでされると許すしかないじゃないか神様の部下のことも。

「・・・いいですよもう住んだことですし」

「スマン。・・・このお詫びとしてオヌシを転生させようと思っているのじゃが・・・どうじゃ？」

「本当ですかッ!？」

「うむ。それとオヌシの願いを3つまで叶えてやろう」

おおッ!! 気前がいいぞこの神様。・・・正直ここまでされるとこちがなんか罪悪感感じるんだけど・・・まあいいか。

「んじゃその前に行く世界のこと教えてくれない？」

「勿論じゃ。オヌシが行ける世界は、ISの世界、リリカルなのはの世界それと緋弾のアリアの世界じゃ。どれがいいかの？」

「んーじゃ、ISの世界で」

「結構即答じゃのう。いいのかな？」

「ん。言われた世界の中で一番好きなのがISの世界だから。」

まあ、本当はほかの世界に比べて死ぬ確率が一応低そうかなって思ったからだけど。一番好きってのは本心だけどね。

「分かったのじゃ。では願いは？」

「まずは、あいえすに乗れること。」

「まあそれがないとつまらんからのう。」

「それと身体能力が千冬さんより少し下」

「最強じゃなくていいのかな？」

「ん。あんまり強すぎると目を付けられやすいから。」

政府に狙われるなんてとんでもないし、めんどくさいことありやしないからな。

「それでも十分目を付けられそうじゃがの」

「いいっての。それと、最後はISはスパロボの機体で、ファーストシフト一次移行はエクสบインがいい」

「ふむ。以上かの？」

「おう。よろしく頼むよ」

「じゃ、始めるかの。」

神様が、俺の効いたことのない言葉を唱える。すると俺の体が光に包まれ、この空間一杯に広がると光は俺の中に消えてくように無くなった。

「・・・これで終わり？」

「うむ。後は、ISの世界に行くだけじゃが・・・気をつけれ？オヌシを送ると同時におそらくイレギュラーと一緒に入り込むはずじゃ。オヌシにはそれを駆除してもらうことにもなる」

「了解さ。転生させてもらうんだ。そんなくらいの事くらい遣らせてもらうよ」

「そうかの。では送らせてもらおうかの」

「ん。色々ありがとう神様」

「・・・オヌシ幸あらんことを」

神様は俺に能力をくれた時とは違う、言葉で俺をあいえすの世界へと送り出してくれた。・・・コレから色々大変かもな・・・でも第二の人生だおもいつきりたのしむさッ

第2話クラスメイトは全員女子！？（前書き）

漸く主人公の名前が出ます。
それと殆ど原作通りです。

第2話 クラスメイトは全員女子!?

「全員揃っていますねーそれじゃあSHR始めますよー」

転生して早二ヶ月。．．．とうとう俺もこの学園の生徒になっています。．．．はあこの二ヶ月いろいろあったな。．．．まあそれは置いて、さっきの号令の声は、

この一年一組の副担任「山田真耶」先生だ。上から読んでも下から読んでもやまだまや。．．．うん。とても覚えやすい。

「じゃっじゃあ自己紹介をお願いします」

そう言うがクラスメイトたちはシーンとしている。．．．中々薄情だなキミ達。まあ俺もだけど。にしても気まずいなあ。．．．クラスの女子に何か舐め回されるように見られているような気がする。

「．．．くん．．．織斑一夏君ッ」

「はっはい!？」

「あっあのっいきなり大きな声出しておっ怒ってるかな?ゴメンねでも自己紹介「あ」から始まって今「お」だから織斑来んなんだよね。だからね、ご、ごめんね?自己紹介してくれるかな?だ、ダメかな?」

．．．山田先生アンタ誤りすぎだろう。教師だからもつと堂々としていいと思うけど．．．それにしても一夏何か変なこと考えてんじゃないのか?

「い、いやそんなに謝られても・・・ってか自己紹介しますから先生落ち着いてください。」

「ほ、本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ？」

「本当ですよ。・・・ええーと織斑一夏です。よろしくお願いします。」

戸惑い気味に言う一夏。・・・しかし、クラスの子はもうちよつとしゃべってよと言わんばかりに見ている。・・・あれはきついだろうな・・・あつ一夏が唯一知り合いの篠ノ乃箒にアイコンタクトを送る。・・・しかし失敗
意を決したのか一夏は

「・・・以上ですっ」

「プツ・・・アハハハッ」

ガタタッ

何人かの女子が椅子からコケる。・・・しかし原作読んでてもこのシーンは面白いなあ。だから飽きないんだよひと夏には。『パアン』

「いってえー・・・げえ関羽ッ!？」

『パアン』

「誰が三国志の英雄か馬鹿者」

おおう、すごい威力だ。あんなので叩かれたら凄まじい勢いで脳が衰えるんじゃないか？

「あ、織斑先生。会議の方はもう終わられたんですか？」

「ああ。山田君クラスへの挨拶を押し付けてしまつてすまなかつたな」

一夏の時との対応が違つのは・・・日頃の行いだらう

「おい。お前も自己紹介しろ」

「へーい。」

『パァン』

「・・・神楽湊です。そこにいる織斑一夏と同じで男子でISを使える奴です。・・・まあ趣味は読書と料理。特技は機械いじりです。よろしく願います。」

ああー痛かつた。本当シヤレに並ん痛さだ。・・・まあ自己紹介はあんなもんでいいだろ。現に織斑先生から出席簿アタックが飛んでこないし。

「・・・お前もあのくらいできるようになれ」

「分かつたよ千冬ねえ『パァン』いてえ！？」

「織斑先生だ馬鹿者」

「こほん。．．．諸君私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言葉をよく聞き、よく理解しろ。できないことは出来るまで指導してやる。私の仕事は、弱冠15歳を16歳に鍛え上げることだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな？」

それって結局逆らえないんじゃない？．．．なんつー絶対王政？

「『『『『きやああああああああ』』』」

ぬおうつ！？コレは．．．実際に聞くと耳に来る．．．この女子は超音波でも放っているのか？

「きゃー！ー本物の千冬様よ！？ずっとファンでした。」

「私、お姉さまに憧れて北九州からやって来たんですッ！！」

「ああ．．．なんて凜々しいお顔。．．．しばらくオカズに困らないわ」

すごい人気だなあ．．．まあ最後の人の発言は気にしないことにする．．．なんのオカズにするのかは．．．まあわかるだろう。

俺も物凄い歓声に正気味になっていると織斑先生が額に手を当てながら

「よくまあ毎年これだけのバカ者共が集まるものだ。．．．それとも何か？私のクラスだけに集中させられているのか？」

「きゃあああお姉さま。もっと叱って、もっと罵ってッ！」

「でも時には優しくして」

「そして、つけあがらないよう躡してえ」

・・・ダメだこいつら早く何とかしないと。・・・あつ織斑先生本気で呆れている。まあしょうがないかこんなのばかりだし。

「・・・はあ。ほらSHRはもう終了だ。コレからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが基本動作を身に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろよくなくとも返事をしろ。私の言葉には返事をしろいいな？」

おお本当に凄い鬼教官っぷりだ。・・・まあ織斑先生も出ていったし、授業が始まる前に一夏に接触しておくか。・・・からかいがてらに・・・な

第3話宣戦布告（前書き）

意外とまだヒロイン登場まで遠い（――）

第3話宣戦布告

「なあ神楽湊、でいいよな？」

こっちから声をかけようとしていたらあっちの方から声を掛けてきた。まあ好都合だけどね。

「おう。そう言うキミは織斑でいいんだよな？」

「一夏でいいよ。男子なんて俺とお前だけだし仲良くしようぜ」

「じゃ、俺も湊でいいよ。よろしくな一夏。」

俺と一夏は、握手を交わした。・・・意外と親しみやすいな一夏のやつ、だからモテるのか？・・・うーむコレは是非ともコツを聞きたいがコイツは無自覚だろうな。

「ちょっといいか？」

「ん？ 筭？」

「神楽・・・だったか？コイツを少し借りてもいいだろうか？」

「おお。構わんよ篠ノ乃さん」

「そうか。スマンナ。」

「わりい湊。また後で話そうな？」

「はいはい。いいから行ってこい」

そう言つて俺は箒と一夏が教室から出ていくのを見送る。・・・さて、この好機の視線をどうしようかな・・・まあ後で一夏に憂さ晴らしするとうかが

「ねね、みつくん。」

「？みつくん？」

「うん。湊くんだからみつくん。」

「まあいいや。・・・でどうしたの・・・えっと」

「あつ、ごめんねー私は布仏本音。のほほんでいいよー。」

本音ことのほほんさんが話しかけてきた。原作通りダボダボした制服だな。まあ不思議と似合っているけど

「んでのほほんさんはどのような要件かな？」

「んー取り敢えず挨拶しておこうと思つてー」

「あり？そつなの？」

意外だ。意外に礼儀正しい。・・・コレは原作でののほほんさんに対する評価を見直す必要があるかもしれない

「うんそだよー。あ、もうすぐ時間だから戻るねー」

「じゃあまた後で？」

そう言った直後授業開始を知らせるチャイムが鳴った。言わずもがな一夏たちは織斑先生の制裁を受けることが確定した。

「
であるからしてISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したISを運用した場合は、刑法によって罰せられ」

ふうむ。勉強になるなコレは。・・・えっ？神様から知識は貰わなかったのかって？・・・だってそれじゃあ授業が退屈だろう？それに知識を自分で育むのも悪くないし。

「というわけです。・・・織斑君？」

「えっ！？・・・はい」

「何か今までで分からないところがありますか？」

「えっとあの・・・」

「何ですか？遠慮せずに行ってくださいね！！私は先生ですから！」

・・・うん。山田先生。そのやる気は尊敬しますが・・・

「はい先生っ」

「何ですか織斑君」

「殆どわかりません」

「え・・・殆どですか？」

ほら、流石に山田先生も表情が引きつっている。全く一夏って奴は・・・まあ面白いからいいけど。

「他にここまでわからない人はいますか？」

しーーーーーーーん

「・・・織斑。入学前に渡した参考書は読んだか？」

「参考書？・・・ああ。古い電話帳と間違えて捨てました。」

『パァン』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3764ba/>

I S 転生者の軌跡

2012年1月10日20時57分発行